

ファミリア・プロダクション(チュニジア)
Familia Productions (Tunisia)

脚本: ジャリラ・バッカー / 演出: ファーデル・ジャイビ

Text : Jalila Baccar / directed by: Fadhel Jaibi

『ジュヌン - 狂気』

JUNUN

< アラビア語上演・日本語字幕付 >

主催: NPO法人アートネットワーク・ジャパン

中東シリーズ共催: 独立行政法人国際交流基金

協賛: アサヒビール(株) / (株)資生堂 / トヨタ自動車(株) / 松下電器産業(株)



© Dali LAMOUCI

2005年3月18日(金) - 20日(祝・日)

パークタワーホール

お 問 合 せ

東京国際芸術祭(TIF)

TEL. 03-5961-5202/ FAX. 03-5961-5207

tif@anj.or.jp

作品「ジュヌン - 狂気」

東京国際芸術祭では、アラブ演劇の最高峰と評されるチュニジアの演出家、ファーデル・ジャイビ「ジュヌン - 狂気」をアジアで初めて紹介します。社会と狂気の関係を描いた本作品は、2001年カルタゴ演劇祭で上演され、一夜にして1万人もの観客を集めたというほど圧倒的な支持を受けました。02年にはチュニジアから初めてアヴィニョン演劇祭の正式公演を行うなど、アラブ世界のみならずヨーロッパ全土でも大きな反響を得た作品です。

ミシェル・フーコーの弟子でチュニジア人女性精神科医、ネジア・ゼンニの著作『Chronique d'un discours schizophrène - 精神分裂病ディスクリールの記録』をもとに、脚本家・女優のジャリラ・バツカールが脚本を執筆。実在の統合失調症患者¹と女性精神療法医の15年に渡る対話を通じて、チュニジア社会に生きる若者の出口なき絶望と屈折、内面の崩壊と再構築を見事に描く。チュニジアの“現在”を通して日本にも共通する現代社会の病について深く問いかける問題作。

ストーリー

舞台は現代のチュニス郊外。主人公ヌンは25歳、読み書きのできない統合失調症患者。11人兄弟の貧困層の家庭に生まれる。虐待を繰り返すアル中の父、その父に虐げられ、貧困にあえぐ母。失業、犯罪、ドラッグ、売春の中に捨て置かれる子どもたち。家族の中心であった父が死に、ヌンの姉の結婚式当日、婚礼の祈りを捧げる瞬間、ヌンは狂気的な笑いとしみに襲われチュニスの精神病院に収容される。

そこでヌンは中年の女性精神療法医と出会う。病院という制度や患者に対する非人間的な扱いに対する深い疑念を抱く彼女にとって、ヌンは精神的逸脱者たちを苦しめるひどい治療に対する戦いへの支えとなっていく。

ヌンは病院から家族のもとに戻されるが、悲惨な家庭環境は彼を苦しめ続ける。長男を偏愛しヌンの狂気を受け入れられない母親。刑務所から戻り、父親亡きあと家族の暴君として振舞う長男ハ(KHA)。ヌンを感覚的に理解し、精神病患者として扱うことを拒む娼婦の妹ワウ(WAW)。未婚の母で深い孤独を隠そうと暴力的に振る舞い自殺を繰り返す妹サ(SA)。ヌンの身代わりとして家庭の不幸を背負う口のきけない妹カフ(KAF)。黒人商人の裕福な家庭出身で、ヌンの友人でワウを慕うジム(JYM)……。ヌンを迎えた家族は、さらなる暴力と悲惨の中、激しくぶつかり合う。

ヌンの家庭を訪れ対話を続ける精神療法医は、ヌンが置かれている社会的状況や人間関係に深く踏み込み、やがて医師としてのモラルや規律を逸脱していく。そして彼女は、この字の読めない若者が、自由と真実を激しく求める内的葛藤の過程で、詩的で明晰な魂の言葉を獲得するのを目の当たりにするのだが……。

¹ 旧称:精神分裂症。日本精神神経学会は2002年、1937年から使われてきた「精神分裂病」という病名を「統合失調症」に変更することに決定。現在、メディアや出版業界など多くの領域で、精神分裂病を統合失調症に変更する作業が進められている。(参照:日本精神神経学会 ホームページ)



© Dali LAMOUCHE

個人の病理から浮かび上がる現代社会の病理

実在の人物でもあるヌンは、家族の崩壊、貧困と虐待、アラブ社会の敗北、宗教的抑圧など、さまざまな社会的重圧によって押しつぶされた若者の象徴、さらにチュニジア社会そのものの象徴として描かれている。

演出家ファーデル・ジャイビは語る。

「原作者ネジア・ゼンニが、生まれたばかりの子犬とひきかえに自分の作品を持ってきたんだ。すぐにこの作品を舞台でやらなければならないと確信した。なぜならこの本は、ヌン(統合失調症患者)とその精神療法医との対話を通して、現代のチュニジアの社会そのものを語っているからだ。」

長い間家族の暴君として妻や子どもを虐待してきた父親が死に、彼を激しく憎みながらも絶対的な存在の不在を受け入れられないヌンや家族たち。また、母親と長兄の間には近親相姦にも似た相互依存の関係があり、妹たちは売春婦や未婚の母として男性社会から排斥され、未来に希望を持ってない。ヌンの家族は、貧困と暴力、絶望に満ちたカオスであり、アラブ・イスラムの伝統的社会体系と現代チュニジア社会の断層そのものであるといえよう。そこでは、美しい地中海の国というイメージからは程遠いチュニジア社会の諸問題が否応なしにあぶりだされる。

そんな家庭でも社会でも認められず、狂気の中で自らの「言葉」をひたすら求めるヌンは、精神療法医との対話を通じて、彼女への愛情に目覚めると同時に、自らの内に潜む詩的感受性や明晰な思考を獲得し、生きる希望を見出す。

「(実在の)ヌンはそれでも自らの人生や社会、家族、神に対して実に明晰で信じられないほど詩的な視線を向ける。私を驚嘆させたのは、この人物の明晰性だ。個人の病理を通して、あたかも社会のあらゆる病理を見せているような。ヌンが要求するもの、それは認められ、表現し、言葉を発する権利。彼は家族や社会、世事や宗教といった制度に押しつぶされた若者の象徴なのだ。人生を再構築しようとするヌンは、建て直しを図ろうとするチュニジア社会そのものと重なる。」(ジャリラ・バッカー)

ヌンと精神科医。実話に基づく二人の15年に渡る悲劇的かつ美しい関係が凝縮された舞台は、観客に狂気と社会の関係を静かに、しかし強く提示している。

この絶望する人々の苦悩を、一見ダンスのような激しい動きで翻訳する役者たちの身体的存在感。その力強いスケールと、マイクを通して語られる繊細で詩的な対話。そのコントラストも作品にさらなる美しさを与えている。

*** プレス評 ***

狂気と社会の関係、精神科医と患者の複雑な関係が見事に提示されている。観客は立ち上がって拍手を贈った。

[2001年3月14日 Réalité]

3時間も続くかと思われた公演が終わり、観客が唯一欲したこと、それは沈黙を保つことであった。我々はこの作品の美の前に頭をたれた。[2001年2月9日 Le Quotidien]

苦悩とポエジー、抑圧と純真さ、悲壮さと治療の間の振動。この作品は(アヴィニョン)演劇祭の中で一番派手な芝居ではない。...おそらくこの作品は、作品の持つ繊細さゆえに最も感動的な作品であろう。

[2002年7月24日 Le Figaro]



© Dali LAMOUCHE

「ジュヌン - 狂気」 公演履歴

- | | |
|-----------|------------------------------------|
| 2001年 2月 | 初演、チュニス市立劇場(チュニス、チュニジア) |
| 3月 | アンマン演劇祭(アンマン、ヨルダン) |
| 3月 | 「スースの春」フェスティバル(スース、チュニジア) |
| 7月 | カルタゴ演劇祭(カルタゴ、チュニジア) |
| 8月 | チュニジア各地のフェスティバルを巡回 |
| 2002年 7月 | アヴィニョン演劇祭(アヴィニョン、フランス) |
| 9月 | バーゼル演劇祭(バーゼル、スイス) |
| 10月 | リモージュ・フランス語圏演劇祭(リモージュ、フランス) |
| 10月 | ベルリン演劇祭(ベルリン、ドイツ) |
| 2003年 4月 | ラバト・アラブ演劇祭(ラバト、モロッコ) |
| 5月 | トルン国際演劇祭(トルン、ポーランド) |
| 5月 | トゥルスキー劇場 (マルセイユ、フランス) |
| 9月 | ブエノスアイレス・フェスティバル (ブエノスアイレス、アルゼンチン) |
| 10月 | スファックス市立劇場(スファックス、チュニジア) |
| 11月 | ヨーロッパ・アラブ第一演劇祭(バラカルド劇場、ビルバオ、スペイン) |
| 2004年 12月 | ヨーロッパ・地中海演劇祭 (ピッコロ劇場、ミラノ、イタリア) |

演出： ファーデル・ジャイビ

現在中東アラブ世界で最も高い評価を受けている演出家の一人。

1945 年チュニス郊外に生まれる。父親はトルコ系移民。母親はアンダルシア出身。

幼少の頃より強く演劇や映画にひかれ、自ら劇団を組織し演出を始める。67年チュニア初の演劇分野の給費留学生として渡仏。68年5月革命を体験、現代演劇の大きな変革期に身を投じる。留学期間にパリ・ソルボンヌ大学で演劇を学び修士号を取得、またパリで自らの劇団を旗揚げする。

5年間の留学を経てチュニアに帰国、72年チュニア南部の都市ガフサより要請を受け、数名の仲間とともにガフサ劇団 Sud (Théâtre du Sud de Gafsa) を創設。この地方に多い炭鉱労働者や失業者を役者として起用し、刑務所や軍隊の兵舎、食堂などで公演活動を展開。しかし政治的圧力がかかり3年後に解散する。その後チュニア文化省からの要請を受け、演劇の理論と実践を教える演劇芸術センター (Centre d'Art Dramatique) のディレクターに就任。ガフサの仲間たちと共同ディレクション体制をしく。教育だけではなく新作創作も行うセンターにすべく、75年にはチュニア初の民間劇団、チュニア新劇団 (Nouveau Théâtre de Tunis) を設立。数多くの作品を演出する。93年、妻であり女優・脚本家のジャリラ・バッカールと自らの劇団ファミリア・プロダクションを設立、アラブ演劇の金字塔ともいえる傑作『Familia—ファミリア』を発表、不動の地位を確立する。滅びゆく伝統社会を強い政治性とともに描くこの作品はこれまでに国内外で200回以上も公演が行われた。98年からはジャリラ・バッカールが脚本を手がける作品を2年に1作のペースで演出し、アラブ世界のみならずヨーロッパで高い評価を得ている。



「まず演劇はチュニア社会の鏡としての機能を果たさなければならない。なぜなら我々は断固として自分たちの国、ここチュニアに根をおろしている。チュニアで、チュニアのために表現する演劇を通じてからこそ、人間に共通する普遍性に触れることができる。我々の作品がすべての人の共感を呼ぶのもそのためだ。」(ファーデル・ジャイビ)

脚本・女優： ジャリラ・バッカール



1952年チュニス生まれ。女優、脚本家。パリの高等師範学校(エコール・ノルマル・シュペリユール)に学ぶ。73年ファーデル・ジャイビ率いるガフサの劇団 Sud に参加、75年にはジャイビらと共にチュニア新劇団を設立、94年にはファミリア・プロダクションを共同設立。女優として多くの作品の主演を務める。特に93年に主役を演じた『Familia - ファミリア』では絶賛され舞台女優として不動の地位を確立。98年より脚本を手がけ、『アイダを探して』(98年)、『ジュヌー—狂気』(2001年)、『アラベルリン』(02年)を発表している。

ファミリア・プロダクション

1994年、ファーデル・ジャイビ演出『Familia—ファミリア』の発表に合わせて設立されたカンパニー。チュニスを拠点とし、ファーデル・ジャイビが演出する演劇や映画の制作を主としているが、作品ごとに新しいキャスティングを行うプロダクションの形態をとる。

彼らは拠点とする劇場を持っていない。新作の制作にあたっては、作品ごとにチュニス市立劇場と契約を交わし、劇場ホールをリハーサルと上演会場として使用している。しかしこれはヨーロッパで行われているレジデント・カンパニー制度もしくは劇場・劇団間の共同制作からは程遠いと、同カンパニー・マネージャーのハビブ・ベルヘディは説明する。

劇場というハードを持たず、また国からの公的援助も受けていない彼らの活動は、チュニジア国内で誇る圧倒的な観客動員数や、中東アラブ社会やヨーロッパ諸国の劇場やフェスティバルとの強いネットワークに支えられている。2001年カルタゴ演劇祭では、古代ローマ劇場に1万人近い観客が一度に『ジュヌン—狂気』を観劇するなど、長年の活動の成果は観客の質と数の向上という形で現れているという。

05年にはパリのオデオン座などとの共同制作による新作を予定しており、ますます世界の演劇界から注目を集める存在となっている。

公演概要

公演タイトル:	Junun	『ジュヌン - 狂気』
原作:	Nejia Zemni	ネジア・ゼンニ
脚本:	Jalila BACCAR	ジャリラ・バッカー
演出・照明:	Fadhel JAIBI	ファーデル・ジャイビ
翻案・ドラマツルク:	Jalila BACCAR Fadhel JAIBI	ジャリラ・バッカー ファーデル・ジャイビ
キャスト:	Jalila BACCAR Fatma BEN SAIDANE Mohamed Ali BEN JEMAA Karim KEFI Najoua JENDOUBI Besma ELEUCH Salha NASRAOUI Kais AOUIDIDI	ジャリラ・バッカー (精神療法医) ファトゥマ・ベンサイデン (母親) モハンマドアリ・ベンジェマ (NUN - ヌン) ケリン・ケフィ (JYM - ジム) ナジュア・ジェンドゥビ (SA - サ) バスマ・エラシ (KAF - カフ) サルハ・ナサラウィ (WAW - ウァウ) カイス・アウイディディ (KHA - ハ)
舞台美術:	Kais ROSTOM	カイス・ロストン
音楽:	PIVIO / Aldo De SCALSI	ピピオ / アルド・ディスカルジ
振付:	Nawel SKANDRANI	ナウェル・スカンドラーニ
演出助手:	Narjess BEN AMMAR	ナルジェス・ベンアマール
照明:	Ahmed BELHAJ	アハメド・ベルハジ
音響:	Salah CHARGUI	サラ・シェルギ

衣装: Jalila Madani ジャリラ・マダニ
舞台監督: Sabri ATROUS サブリ・アトルース
制作: Habib BEL HEDI ハビブ・ベルヘディ

日本側スタッフ

舞台監督: 小林裕二
照明: 小笠原純(ファクター)
音響: 相川晶(サウンド・ウィーズ)
制作: 相馬千秋(NPO 法人アートネットワーク・ジャパン)

上演言語: アラビア語・日本語字幕付
上演時間: 1 時間 40 分

公演日: 3月18日(金)―3月20日(祝・日)

3 月 18 日 (金)	3 月 19 日 (土)	3 月 20 日 (祝・日)
	14:00	
19:30	19:30	17:00

終演後、ポスト・パフォーマンス・トークあり

会場: パークタワーホール
料金: 【全席指定・税込】4,000 円 / 学生 2,500 円
(当日要学生証提示、枚数制限あり、TIF でのみ取扱)
中東2カンパニー公演セット券 6,000 円(パレスチナ・チュニジア)
(限定 100 セット・TIF でのみ取扱)
前売開始: 2005 年 1 月 14 日(金)
チケット取扱: チケットぴあ TEL.0570-02-9999 / 0570-02-9966 (P コード 358-974)
東京国際芸術祭(TIF) TEL. 03-5961-5202 <http://anj.or.jp>

お問い合わせ: 東京国際芸術祭(TIF) TEL 03-5961-5202
tif@anj.or.jp <http://anj.or.jp>